「仿製」三角縁神獣鏡の生産とその展開

岩本　崇

【要約】本稿では、「仿製」三角縁神獣鏡を対象に、銅鏡の研究ではほとんど着目されていない形態的特徴の異同から、その生産と展開について考察を試みた。まず、鏡にみる形態の共通現象が規格と強く結びついていることを示し、そうした規格が鏡の製作時にイメージあるいは決定される規範のあり方をも反映している可能性が高いと考えた。規格という点に着目したことで、「仿製」三角縁神獣鏡の製作動向をより具体的に論じることが可能となり、類型的と評価されてきた「仿製」三角縁神獣鏡の生産に製作者ないしは製作者集団を異にする複数の系統が関与していたこと、併行して一定の規格に基づいた鏡群を生産していたことを明らかにした。そして、舶載三角縁神獣鏡から「仿製」三角縁神獣鏡への移行が系統的なつながりのある型式学的な変化であるとともに、そこには型式的な差が存在すると述べた。さらに、規格の強弱から生産の画期を見出し、その画期が「仿製」鏡という次元をこえた三角縁神獣鏡全体の枠組みのなかで理解すべきものであると結論づけた。

史林　八六巻五号　二〇〇三年九月

はじめに

古墳に副葬されたさまざまな器物のなかでも、三角縁神獣鏡は畿内地域を中心として日本列島に広く分布し、さらに同笵鏡[1]とよばれる細部まで同一の文様の鏡が各地の首長墳から出土するという特色をもつ。こうした現象にたいして、それまでの社会とは異なる、一元的な配布主体とその背景にある政治的活動の存在を想定できる点が重要であり[2]、三角縁神獣

鏡が古墳時代社会の成立と古墳時代前期の政治的動向を検討するうえで有効な資料であることをうかがわせる。

さて、三角縁神獣鏡にかんする議論の端緒はその製作地と製作年代の追求にあり、その後も長く主たる研究の主題となってきた。しかし、一九七〇年代以降、型式学的検討から三角縁神獣鏡に迫る論考が増加し[3]、一九八〇年代から九〇年代に至ると、それまで単純に多様であると説明されてきた三角縁神獣鏡にも、製作者集団などの相違に基づく系統差や一定の製作時間幅の存在が明らかとなってきた[4]。また、こうした研究状況の変化とともに、三角縁神獣鏡の製作地にかんする研究も大きく前進した[5]。

しかし、そうした研究の多くは三角縁神獣鏡のなかでも大半を占める舶載鏡とされる一群を対象とし、「仿製」鏡[6]として分離しうる一群を深く検討することは少ない。とくに、製作者集団などの違いに基づく系統の整理や型式系列[7]の検討といった基礎的な研究をほとんどふまえることなく、年代論に終始してきた感が強い。こうした研究状況の背景には、「仿製」三角縁神獣鏡があくまでも仿製鏡であるという理解と、それゆえその製作を一系統的・一系列的にとらえることが可能であるという評価が強く影響している。また、「仿製」三角縁神獣鏡が副葬される古墳時代前期後半以降は、仿製鏡などほかの副葬品も多く、「仿製」三角縁神獣鏡を出土する古墳が限られるという事実もその背景にあろう。しかし、三角縁神獣鏡という器物の性格を理解するうえで、「仿製」三角縁神獣鏡の製作動向を検討することは必要不可欠である。「仿製」三角縁神獣鏡の終焉は、三角縁神獣鏡という一つの器物の終焉であり、その器物としての意義を考える際にきわめて重要な情報を提供すると考える。ひいては古墳時代前期の社会の特質をより具体的に把握することが可能となろう。

ところで、鏡には銘文や文様という着目しやすい要素があり、これまでの諸研究でも主な分析の視点となってきた。ただし、文様はのちにも述べるようにその変化が一様ではない可能性があり、必ずしももっとも有効な分析の視点であるとは限らない。ほかの要素に着目することで、銅鏡製作の別の側面をうかがうことも可能と考える。

こうしたことから、本稿では「仿製」三角縁神獣鏡を検討の対象として、これまで鏡の研究においてほとんどとりあげ

られていない形態的特徴を主たる分析の視点として検討を加える。とくに、系統や型式系列の整理をふまえつつ、「仿製」三角縁神獣鏡の変遷を跡づけ、さらに舶載三角縁神獣鏡との関係[8]や、製作動向について考察することにしたい。

① 同笵鏡という用語には賛否両論があるが、本稿ではその学史的意義を重視したうえで、ひとまずこの用語を使用する【小林一九五五】。

② 小林行雄が同笵鏡を重視したのは、同笵鏡が型式学的にみてきわめて同一性が強いという点にある。同笵鏡にたいする多くの批判はこの点にかかわるものがほとんどであるが、「仿製」三角縁神獣鏡の製作が同笵技法によっていたことは鋳造欠陥から検証されている【八賀一九八四】。また、舶載三角縁神獣鏡でも同笵鏡間で湯口方向が一定していたという指摘があり【今津二〇〇〇】、それぞれの鏡がきわめて近い時空間で製作された傍証になると考える。

③ 【近藤一九七三】、【小林一九七六】。

④ 【新納一九九一】、【澤田一九九三】、【福永一九九四b】、【岸本一九九五】、【森下一九九八b・c】。

⑤ 【福永一九九一】。

⑥ 三角縁神獣鏡に舶載と仿製があることは古くから指摘されており、そのほかの仿製鏡とは系統的なつながりが薄く【森下一九九一、二〇頁】、同笵鏡をもつという点で舶載三角縁神獣鏡との関係が強い。したがって、本稿では仿製に「　」をつけてそのほかの仿製鏡と区別する。

⑦ 本稿では形態の異同から導かれた区分を「鏡群」とよび、一連の変化を示す複数の鏡群の集合を「系列」とよぶこととしたい。また、主文様表現の異同により導かれる区分を「系統」ととらえる。なお、先行研究の成果によれば、系統差は製作者集団の差に基づく可能性が高い【岸本一九八九】。

⑧ 「仿製」三角縁神獣鏡が仿製鏡であるという理解が支配的であるためか、舶載三角縁神獣鏡との関係を詳細に議論した論考は少ない。しかし、「仿製」三角縁神獣鏡が仿製鏡であるという前提そのものが成り立つかどうかについても詳しく検討されているわけではない。

第一章　研　究　史

すでに述べたとおり、系統と型式系列の整理をふまえつつ、「仿製」三角縁神獣鏡の製作動向にまで踏み込んだ論考はない。しかし、これまでに発表された論考のなかにも、個々の要素の検討にはすぐれた蓄積がある。ここでは、分析に入る準備作業として「仿製」三角縁神獣鏡について型式学的研究を試みた先学の視点と成果を整理し、問題の所在を明らかにしておきたい。

もっともはやくに、「仿製」三角縁神獣鏡を詳細に検討した近藤喬一は、舶載鏡と「仿製」鏡の区分を目的に、内区神像の向き、獣像の頭位、獣文帯のあり方、乳数などから、獣文帯三神三獣鏡を大きく三群、さらに一部を細分して四群に区分した。このほか唐草文・鳥文帯をもつ一群をあわせると「仿製」三角縁神獣鏡を五群に区分したことになる。そして、それら諸鏡式の系譜関係を整理し、三段階にわたる製作時期差が存在している可能性を示唆した。[1] 近藤の論考は、一部の系譜関係の理解や時間的な位置づけに筆者と異なる点があるが、舶載三角縁神獣鏡との関係を検討した数少ないものであり、その初期の研究でありながらいまなお一定の有効性を保っている。ただし、舶載鏡と「仿製」鏡の区分に主たる目的があったためか、分類した「仿製」三角縁神獣鏡諸鏡群の評価には検討の余地がある。

また、ほぼ同じ時期に小林行雄も「仿製」三角縁神獣鏡を詳しく検討した。研究の主眼を神獣像の配置方式におきながら、その論点は個々の要素にまでおよび、じつに多岐にわたる。[2] そのなかには、単位文様の変遷をはじめとする重要な視点も含まれているが、それら諸要素を総合的に検討して結実させるには至らなかった。

内区主文様を構成する神獣像表現から、舶載三角縁神獣鏡を整理した岸本直文も、同じ論文のなかで「仿製」三角縁神獣鏡の変遷を追求した。その結果、「仿製」三角縁神獣鏡を三段階に整理し、唐草文帯あるいは鳥文帯をもつ資料の位置づけは異なるものの、近藤喬一とほぼ同様の理解に達している。[3] 岸本の研究は、その主眼が舶載三角縁神獣鏡の系統論にあり、神獣像表現が系統整理に有効であることを示した点で高く評価できる。しかし、「仿製」三角縁神獣鏡にはその分析方針が継承されず、表現の差を原鏡からの乖離ととらえて変遷を追求する方針をとっている点には注意したい。

古墳時代の仿製鏡を外区文様から分析した森下章司も、先に述べた小林行雄の神像および獣像の分類案をもとに、「仿製」三角縁神獣鏡を時間的に整理した。ただし、獣像の頭の向きから大きく二系列の存在を認め、両者の併行関係を想定している点で、他の研究とは一線を画す。[4] また、「仿製」三角縁神獣鏡の製作にあたった集団が、ほかの仿製鏡とは異なる技術的・知識的特徴を有していたと指摘した。

こうしたなか新納泉は外区の厚みに着目し、そのほかの要素との対応関係をふまえて、三角縁神獣鏡全体の変遷を検討した。そして、三角縁神獣鏡全体を五段階に整理し、その最終段階に「仿製」鏡を位置づけた。[5] 本稿とのかかわりで重要と考えるのは、三角縁神獣鏡の舶載鏡と「仿製」鏡の変遷が一貫していると指摘した点である。また、その研究視点も文様以外の要素に着目した点で示唆に富むものであり、本稿の視点も新納の着想をベースとする。ただし、研究主眼は、あくまでも変遷の大綱をとらえることにあり、編年を射程に入れたものである。形態的な特徴を年代論にのみ利用している点で本稿とは異なる。着目した要素も外区の厚みと乳の大きさのみで、検討の余地があろう。

内区およびその外周の文様帯にある乳配置という新たな視点から「仿製」三角縁神獣鏡を分析した福永伸哉は、共通する乳配置をもつ鏡同士が強い親縁関係にある可能性を示し、原鏡となる舶載三角縁神獣鏡の乳配置との比較から、乳配置の時間的変遷を考えた。そして、「仿製」三角縁神獣鏡全体を大きく五段階、一二小期に細分した。[6] 乳の配置は鏡の文様の割り付けと不可分であり、製作の本質に迫るうえできわめて有効であると考えるが、細分した各同乳鏡群が一系統的かつ一系列的な変遷のみで説明できるかどうかを検証する必要があろう。

概観したように、「仿製」三角縁神獣鏡にかんする型式学的研究は編年を目的に進められてきた。また、それら諸研究では編年とあわせて舶載三角縁神獣鏡との関係についてもふれられることが多い。しかし、それはあくまでも「仿製」三角縁神獣鏡の変遷の方向性を理解するための一助とするのが目的であって、両者の関係を詳細に検討したものではない。その位置づけ自体も舶載鏡から「仿製」鏡へという定説化した先後関係の見通しからか、十分に評価されてきたとはいえない。[7] また既に指摘されているように、三角縁神獣鏡の舶載鏡と「仿製」鏡の製作地については再検討の必要性がある。[8] 先行研究の多くが、「仿製」三角縁神獣鏡を仿製鏡という枠組みで理解していたためか、「退化」という説明による一系統的な変遷を想定している。[9] しかし、製作地の問題は別にしても、ひとまず両者の系統関係を検討しなければ、変遷や製作動向を具体的に論じることはできないはずである。

本稿では、以上の先行研究における問題点をふまえながら、別稿において得られた見通しをもとに、⑩これまでの銅鏡の研究において十分に検討されていない形態の異同に着目する。また、ほとんど分析がなされてこなかったために、形態の異同が分析の指標としてどのような有効性をもつのかという点についても不明な部分が多い。したがって、鏡の形態が銅鏡製作のいかなる側面を反映しているのかという点にも留意しつつ、以下の検討を進めることにしたい。

① 【近藤一九七三】。
② 【小林一九七六】。
③ 【岸本一九八九】。
④ 【森下一九九一】。
⑤ 【新納一九九一】。
⑥ 【福永一九九二・一九九四a】。また、福永は三世紀末から三一六年の西晋の滅亡に至る中国の混乱によって、舶載三角縁神獣鏡の入手ルートが突発的に断たれたと考え、そこに「仿製」三角縁神獣鏡の製作契機を求めた。三角縁神獣鏡の歴史的意義と古墳時代前期後半に実年代の定点を与えるという点で重要な意義をもつ指摘であるが、「仿製」三角縁神獣鏡が仿製鏡であるという前提が成り立つかどうかによって再検討の必要がある。
⑦ こうした現状をうけて、筆者も一部の「仿製」三角縁神獣鏡にたいし、舶載鏡との関係を含めて、「仿製」鏡の創出に至る過程を詳細に分析した。そして、一部の「仿製」鏡と舶載鏡の内区主文様の神獣像表現が同じであることを指摘し、文様表現やその構成が共通する鏡群のなかにも形態的な異同が存在すると述べた。しかし、論点が一部の鏡群の位置づけにあったこともあり、十分には検討できなかった【岩本二〇〇一a】。
⑧ 【車崎一九九九】。新納が指摘した舶載三角縁神獣鏡と「仿製」鏡にみる変化の一貫性もその必要性を促す【新納一九九一、一八三頁】。
⑨ 製作者と製作地の問題はわけて考えるべきである。製作地の問題に踏み込むには、鋳型が発見されていない以上、状況証拠から迫るほかなく、より多くの検証が必要である。この点については、三角縁神獣鏡の性格を把握するうえで明らかにすべき重要な課題と考えているが、ひとまず今後の検討課題としておきたい。
⑩ 【岩本二〇〇一a・b】。

第二章　型式学的分析

(1) 分類の視点

三角縁神獣鏡を含む銅鏡を型式学的に分析する指標としては、第一に文様がある。しかし、文様に着目するという方法は考古学的な検討において主流をなすものではなく、鏡以外の考古資料では形態的特徴や製作技術に着目する場合が多い。というのも、多くの先学が指摘するように、文様をもつ考古資料を検討する際に、分析の指標として文様がもっとも有効であるとは限らないからである。文様の変化のあり方は必ずしも一様ではない。変異の幅も大きく、いかなる要因により変化したのかを特定することも難しい。また、模倣しやすいという側面から、原型式とその模倣型式とが同時併存する可能性もある。[1] とくに、鏡は一定の原理に基づいて鏡背文様が構成されてはいるものの、文様が機能性に規定されにくいため、変異の幅はより大きいと予想しうる。[2] すなわち、鏡の文様は、それが配されるスペースといった物理的な制約や機能面以外の要因で、容易に変化する可能性が高いのである。とくに、三角縁神獣鏡が模倣を起点として製作された鏡であるならば、[3] その影響はとくに大きいと考える。ただし、文様でも細部の表現が系統整理のうえでは有効であることや、単位文様の互換性が系列を異にする鏡群の併行関係を推定する手がかりとなることは、すでに検証されており、[4] 文様に着目するという方法論自体を否定しているわけではない。

これにたいし、鏡という器物の形態に着目する利点をその製作工程から考えてみたい。銅鏡の鋳型の多くは、挽型を回転させて粘土（真土）を削り出し、乳で分割したうえで文様を刻み込む。「仿製」三角縁神獣鏡もこの例外ではなく、仕上げの研磨が不徹底であるために、[5] 縁部内斜面や鈕上に同心円状にめぐる型挽痕や、鈕頂部に挽型の心棒痕とみられる小さな突起を残す例がある。[6] 挽型がいかなる形状で、その形態がどの程度製品に反映されているのかを具体的に知ることは

困難である。しかし、資料そのものの痕跡から、少なくとも鈕と外区の形態は挽型の形状を反映していると考えてよい。また、形態の一致は究極的には挽型の一致を示すが、それを特定することはさまざまな要因からほとんど不可能である。そもそも銅鏡は手工業製品であり、挽型の形状が鋳型のすべての部分で同じように反映されるとは限らない。さらに鋳造後の鋳バリの削り取りや研磨、熱処理[7]による形状変更も考慮しなければならない。とはいえ、挽型の作成時にすでに製品としての鏡の大部分を規定する可能性は高く[8]、こうした鋳造後の処理による変形を考慮してもなお、挽型作成時のイメージから製品が大きく乖離しているとは考えにくい。したがって、鏡の形態が挽型という製作の本質的な部分と強く結びついている可能性は高い。こうした視点が、変異の大きい文様と比べて、分類の指標としてより適していることは、上述した理由からも首肯できよう。さらに、製作時のイメージと強く相関する可能性が高いということは、規格性という側面とも不可分であり、製作動向を追及するうえでも形態はより有効な視点であると考える。

こうしたことから、本稿では形態のなかでも挽型と強く関連しうる外区・鈕・内区区画と、内区主文様を割り付ける際に重要な役割を担う乳に着目する。分析の対象とする資料は、京都大学文学部考古学研究室が作成した「三角縁神獣鏡目録」において、仿製鏡としたもののうち検討に耐えうると判断した五四種一一八面と、それらとかかわりがとくに深いと考える舶載鏡で、記述の際にはその目録番号を付す[9]。三角縁神獣鏡の各部名称は図1に示す。

(2) 形態的特徴による分類

鏡はさまざまな文様から構成される器物であり、形態もまたいくつかの属性からなるととらえるこ

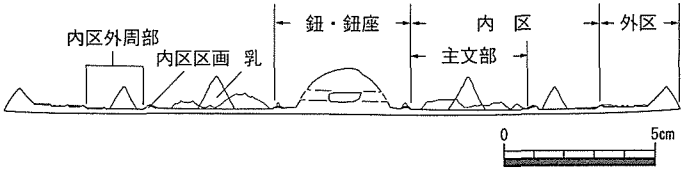

図1　三角縁神獣鏡の各部名称

とができる。そこで本稿では、三角縁神獣鏡という名称にもあるように、縁部を含めた外区[10]をもっとも特徴的な属性と考え、外区の形態を基準に、鈕、内区区画、乳といったほかの形態的属性の対応関係から鏡群を設定する（図2）。

① 外区の形態

外区の形態の異同は、断面の厚みだけでなく、幅といった平面的な要素とも不可分である。そこで、断面形態だけでなく、平面的な形態的特徴も含めて、全体を七形式に区分する。

1式 「仿製」三角縁神獣鏡のなかでももっとも大型の縁部をもつ。厚みは比較的均一である。幅は縁部が大きいため三・五cm前後と広い。縁部以外の部分の幅は外区2・3式と変わらない。

2式 縁部は高く突出し、断面が丈高な三角形である。厚みが比較的均一で、幅は二・八cm前後である。

3式 縁部の突出は2式より小さく、断面は正三角形に近い。厚みは比較的均一である。幅は二・八cm前後。

4式 縁部は小さく、3式より突出度が小さい。断面は正三角形に近い。縁部内斜面長が外斜面長よりかなり短く、内区から外区に至る段差が小さいため、内側にむかって徐々に外区の厚みが薄くなる。幅は三cm前後。

5式 4式と同様に、縁部の突出は小さい。縁部内斜面長が外斜面長よりかなり短く、内区から外区に至る段差が大きいため、厚みは比較的均一である。幅は三・五cm前後と広い。

6式 縁部の突出は「仿製」三角縁神獣鏡のなかでももっとも小さい。縁部断面は比較的小ぶりな三角形を呈する。外区が薄く扁平な例が多い。幅は広く、三cmをこえるものがほとんどである。

7式 縁部の突出は6式と同様に小さい。縁部断面は比較的小ぶりの三角形であり、外区と内区との間に段差がない。幅は三cmをこえ、三・五cmに至る幅の広いものが多い。

② 鈕

鈕は、形態と大きさから、全体を六形式に区分する。[11]

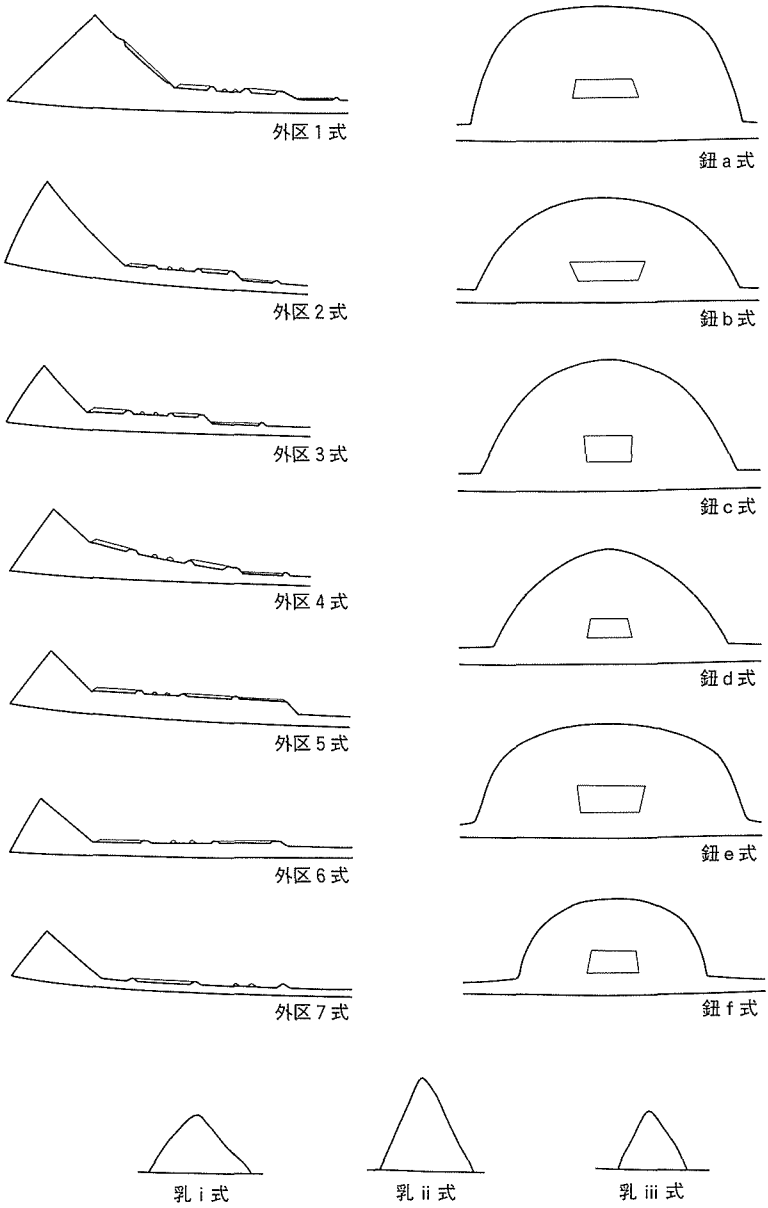

図２　「仿製」三角縁神獣鏡各部の分類（模式図、ほぼ実大）

a式　高さがあり、立ち上がりの傾斜が強い。上面がやや平坦なものであり、断面は台形状である。

b式　底径が三・五cm程度と大きく、高さが低い。立ち上がりの傾斜はやや緩やかで、断面はつぶれた半球形である。

c式　底径三・二cm以上とやや大型で、高さは一・五cm程度と高い。断面形態は比較的整った半球形である。

d式　底径三cm、高さ一・三cm程度とやや小ぶりで、立ち上がりの傾斜が弱い。頂部へとやや先細りする形態をもつ。

e式　立ち上がりの傾斜は強く、底径に比べて高さが低い。断面は扁平な半球形である。

f式　底径が三cmに満たない程度の小ぶりのものである。断面は整った半球形を呈する。

③　内区区画

内区主文部と内区外周部とを区画する円圏（本稿では、内区区画とよぶ）は、断面形態から三つに区分する。

界圏　断面形態が三角形を呈するもの。内斜面に鋸歯文をめぐらす。

圏帯　断面形態が蒲鉾形を呈するもの。幅が文様を区画するほかの圏線より太い。文様はない。

圏線　断面形態は蒲鉾形で、幅が文様帯を区画するほかの圏線と等しく、圏帯に区分したものに比べて細い。

④　内区の乳

内区の乳は、舶載三角縁神獣鏡にみられるような、先端に顕著な丸みをもつ例はなく、すべて尖乳である。そこで、まず底径の差から全体を二分する。さらにその一方では高さの相違が顕著にみられることから、これを二分する。したがって、全体を以下の三形式に区分する。

i式　乳の底径が一・二cm～一・五cmにあり、一・三cm程度のものが多い。高さは一cm未満で、〇・九cm程度のものが多い。やや高さが低い。

ii式　乳の底径が一・二cm～一・五cmにあり、一・三cm程度のものが多い。高さは一cm以上で、一・一cm前後のものが多い。高く突出した乳である。

ⅲ式　乳の底径は〇・九cm～一・一cmにおさまる。高さはばらつきがあり、高く突出したものが多い。

鏡群の設定　外区の形式分類とそのほかの形態的属性との対応関係は表1のとおりである。群別にあたっては、とくに外区と鈕の対応関係を重視した。鏡の形態を規定する挽型の構造を考慮すると、外区と鈕は一連の動作で形成される可能性がきわめて高いからである。内区区画は挽型にその要素を盛り込んでいたのかを判断できず、乳は挽型にその要素を盛り込んでいたとは考えられないので、付加的にあつかった。表を見る限り、外区と鈕は明確に対応し、そのほかの属性もほぼ対応する。したがって、形態的特徴による分類が一定程度の有効性をもつと判断し、「仿製」三角縁神獣鏡全体をA～Jの一〇鏡群に区分する。次節では、この群別の有効性を検証する。

(3)　そのほかの形態的特徴と図像文様からの検証

前節では「仿製」三角縁神獣鏡を形態的特徴からA～Jの一〇鏡群に区分した。ここではおもに図像文様から、先の鏡群設定の妥当性を検証する。また、区分の指標とした属性以外にも各鏡群で形態的な特徴をみとめることができるのかを検討する。さらに細分の余地があるかどうかについても確認しておこう。

A群（図3）二種六面　いずれも主文様表現が共通する。獣像の頭位は縦向きで、頭頂が直線的である。小林神獣像配置L。[12] 鈕座は有節重弧文座。内区外周文様帯は獣文帯と櫛歯文帯の二帯からなる。獣文帯の乳の数は、ほかの大多数が一〇個であるのに対し、一一個となる。すべて乳座がない。とくに縁部がきわめて大きく、その内斜面にまで鋸歯文帯や櫛歯

表1　「仿製」三角縁神獣鏡の諸鏡群

	鈕						乳			内区区画			鏡群
	a	b	c	d	e	f	i	ii	iii	界圏	圏帯	圏線	
外区1式	◎						◎			◎			A
外区2式		◎					◎			◎			B
外区3式		◎					◎			◎			C
			◎				◎			◎			D
				◎				◎		◎			E
						◎	△	◎		◎			F
外区4式				◎			◎	○				◎	G
外区5式					◎				◎			◎	H
外区6式			△			◎	△	◎			○	◎	I
外区7式						◎		◎				◎	J

〔凡例〕　◎：主体的に存在、○：存在、△：わずかに存在。

文帯を配する。なお、外区文様帯の上に小乳をおく例があり（231鏡）、後述のD群と共通する（203・204・205鏡）。このほか、獣文帯の一単位に細線表現の鳥文をもつ例があり、これもD群と共通する（205鏡）。A群はすべて直径もほぼ近似した値をとり、各部の形態のまとまりもきわめて強い。

B群（図3・4）三種三面　いずれも主文様表現が共通し、A群と同じである。神獣像配置K2。鈕座は有節重弧文座である。内区外周文様帯は獣文帯と櫛歯文帯の二帯からなる。獣文帯を一〇個の小ぶりな乳で区画し、乳には例外なく円圏座がともなう。いずれも直径が二二cm程度であり、各部の形態・文様ともにまとまりがきわめて強い。

C群（図3・4）五種一一面　すべて同一の主文様表現で、A・B群と共通する。神獣像配置K2。鈕座は有節重弧文座である。内区外周文様帯は獣文帯と櫛歯文帯の二帯からなる。区分の指標以外の最大の特徴は、一例（229鏡）を除くすべてが、獣文帯に小ぶりな乳を一〇個、獣文帯と櫛歯文帯を区画する圏線の上にさらに小さな乳を一〇個、同心円状に二

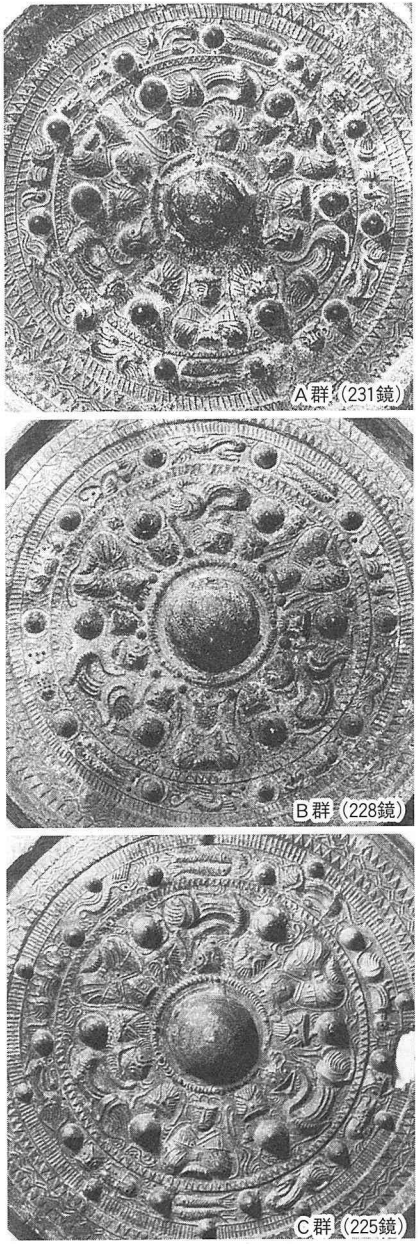

図3　A・B・C群の諸例

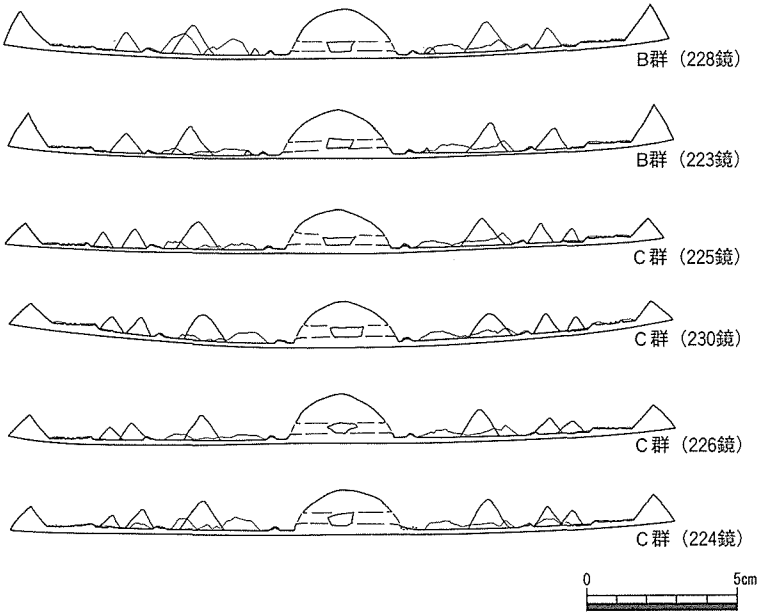

図4　B・C群の諸例

重にめぐらせる点である。直径はいずれも二二cm程度で、まとまりがよい。鏡体の薄く扁平なつくりも共通し、各部の形態的なまとまりもきわめて強い。

D群（図5・6）七種二九面　主文様表現は基本的に同一のものである。獣像の頭位は横向きで、頭頂部に瘤状のふくらみをもつ。外区文様帯上に乳をおくものとおかないものとがあり、両者はほかの要素からも明瞭に区分できる。そこで、外区に乳をおくものをD1群、おかないものをD2群とする。

D1群は（三種九面）、神像表現に二種類あり、A・B・C群と共通するものと、いかり肩のものとがある。神獣像配置は二神二獣形式の配置Jと三神三獣形式の配置K2があり、三神三獣形式の例は直径がいずれも二四cmをこえる。鈕座は配置Jの例が円圏座、配置K2の例が有節重弧文座である。内区外周文様帯は唐草文帯、もしくは鳥文帯という細線表現による文様帯と櫛歯文帯の二帯からなる。ただし、一例のみ内区外周文様帯に波文帯を挿入して三帯構成とする例があり（204鏡）、舶載三角縁神獣鏡の波文帯との関連をうかがわせる。唐草文帯もしくは鳥文帯を一〇個の

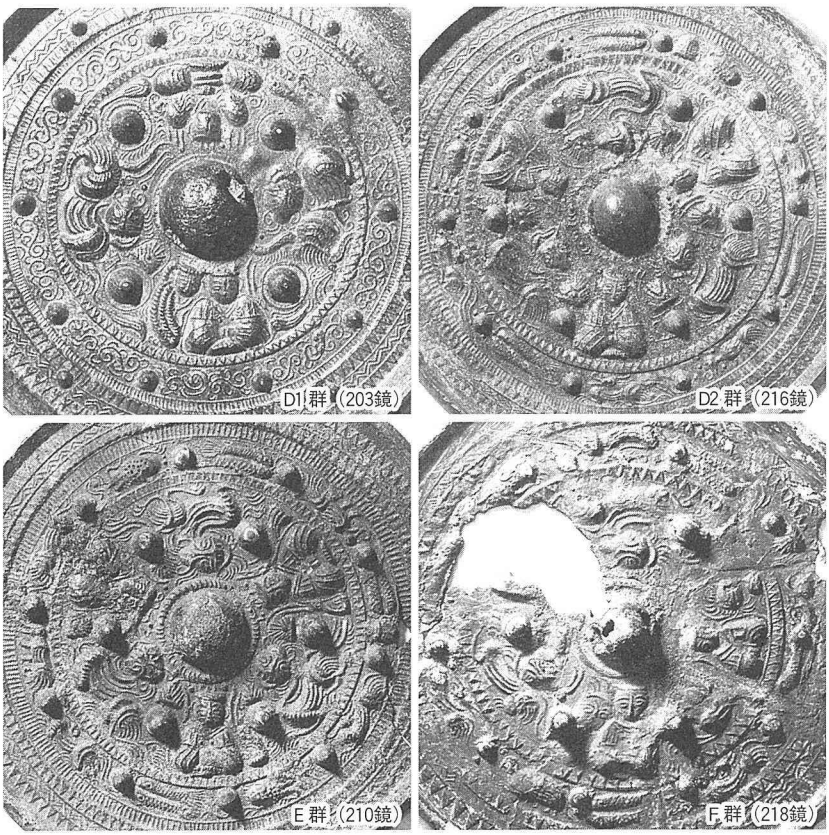

図5　D・E・F群の諸例（1）

乳で区画する。さらに、外区文様帯の上にも一〇個の小乳をおく。

D2群は（四種二〇面）、神像表現がA・B・C群と共通するもののみである。神獣像配置K2。鈕座は有節重弧文座、円圏座のほか、鈕座のないものもある。内区外周文様帯は獣文帯と櫛歯文帯の二帯からなる。獣文帯を一〇個の乳で区画する。直径は二一cm後半台のものがほとんどで、一例のみ二四cmをこえる（216鏡）。なお、鈕はc式に属すが、いずれもD1群より若干小ぶりである。

D群は1・2ともに外区および鈕の形態的なまとまりが強く、とりわけ乳はi式に属す例のなかでも法量にみる凝集性がきわめて高い。直径は二四cm程度のものと二一・五cm程度のものとがあるが、それぞれのなかでの差は最

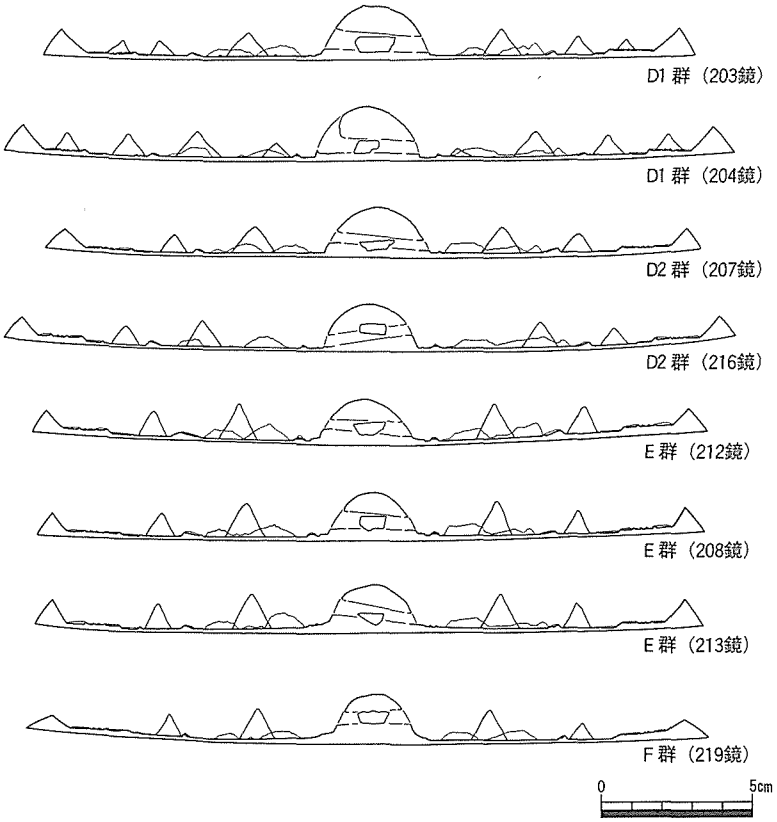

図6　D・E・F群の諸例（2）

大三㎜と小さい。そのいっぽうで、細分した各鏡群は主文様表現や内区外周文様帯、外区文様帯上の乳の有無によって明瞭に区分できる。なお、D1群に比べるとD2群は、縁部と鈕が若干小さい傾向にある。

E群（図5・6）一〇種二六面　主文様の表現はD2群と共通するが、獣像の下顎の表現はD群にみる二重から単純な一本線となる例がほとんどである。神獣像配置K2。鈕座は有節重弧文座で、その内側に円座をともなうものもある。内区外周部に、獣文帯と櫛歯文帯の二帯の文様帯をおく。獣文帯を一〇個の乳で区画する。E群を抽出するうえで重要な指標となるのは乳形式であるが、ii式のなかでも法量の凝集性はきわめて高い。また、外区と鈕の形態もまとまりが強く、直径も二

二cm程度とばらつきがない。

F群（図5・6）五種五面　主文様表現は基本的に先述したD2・E群と共通するが、著しく便化したものとなる。神獣像配置K2を原則とするが、変形形式を一例含む[13]（218鏡）。また、「仿製」三角縁神獣鏡では、神像を配置する一区画には一体のみ神像をおくのを基本とするが[14]、一区画に二体の神像をおく例が目立つ。内区の乳数が五つのものもある。内区外周文様帯はいずれも獣文帯のみからなり、櫛歯文帯を欠く。鋳造技術という点でも、湯廻り不良や型流れのような痕跡が顕著であり、さらに破損した鋳型を張り合わせたような痕跡をもつものもある[15]。なお、F群の諸例は現在のところ、同笵鏡をもつ例が確認されていない。乳ii式をもつが、E群に比べてやや乳の低い例が多い。ただし、いずれも湯廻り不良が顕著であり、本来の高さを反映しているわけではないと考える。直径は二一cmから二三cmまでの間でばらつきがあり、各部の形態にも個体差がある。

G群（図7・8）三種一一面　主文様は、「八」の字形の体部をもつ神像と頭位が縦向きの獣像からなる。神獣像配置はA～F群とは獣像が逆向きになるK1。鈕座は節のない重弧文座、もしくは円圏座である。獣像の肩の部分に巴文状の文様をおく。また、内区乳の下には雲文を配する。内区外周文様帯は獣文帯と櫛歯文帯の二帯からなり、櫛歯文帯が斜行する。獣文帯の表現も主文様表現と同様に便化した特徴的なものである。獣文帯を一〇個の乳で区画する。形態的には、鈕・外区はきわめて強いまとまりを示し、三種のうち二種は直径も一致する。一種は直径が一cm近く小さいなど差がある。また、乳の高さにも差がある。ただし、特徴的な外区や鈕の形態は各資料で非常に共通している。

H群（図7・8）二種六面　主文様は、神像の体部が「八」の字状になる点でG群と共通する。ただし、獣像の頭位が横向きとなり各部の表現も異なる。乳下部にはG群と同様に雲文をおく例がある（236鏡）。神獣像配置K1。鈕座は円圏座である。内区外周文様帯は一帯のみからなり、銘帯と獣文帯という差がある。しかし、銘帯には獣文帯と同様の双魚を配する点で共通性がある。外区文様がきわめて特徴的であり、四帯からなる。外側三帯は三角縁神獣鏡に通例の、鋸歯文

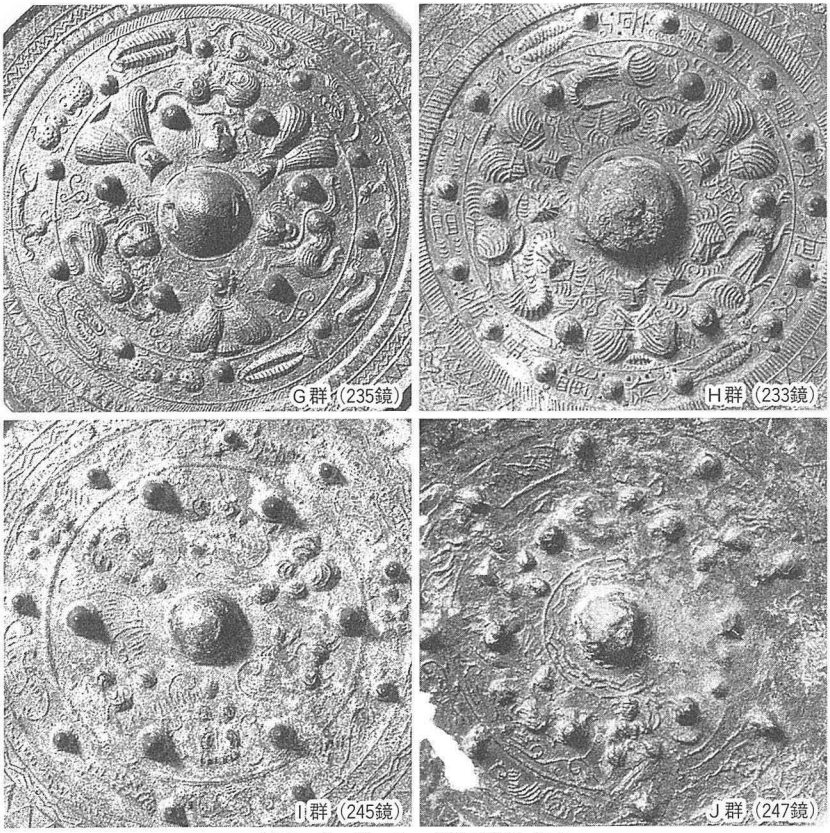

図7　G・H・I・J群の諸例（1）

―複線波文―鋸歯文であるが、もっとも内側は櫛歯文帯となる。この外区上にある櫛歯文帯は、H群が内区外周文様帯の櫛歯文を欠く点から、多くの例で内区外周部におく櫛歯文帯を、外区においたものと判断しうる。二種のみで直径には五㎜の差があるが、G群と同様に特徴的な外区や鈕の形態は各資料のあいだで非常に共通している。

I群（図7・8）一三種一六面　主文様は、神像を五つのふくらみ、獣像を三つのふくらみで表現する。基本的な文様表現は共通するが、神座や神像の腕、獣像の頭部など細部には異同がある。G・H群とほぼ同じように、乳の周囲に雲文をもつ例は多い。神獣像配置はK1が主体で、L1や内区乳が五個となるK1の変形形式がある。鈕座は重弧文座をはじめ、断面蒲鉾形の

圏帯や複線波文をめぐらせるもの、鈕座がないものなど多様である。内区外周文様帯は一帯のみで、獣文帯あるいは獣文帯を細線で表現したと考えうる文様帯をおく。獣文帯は一二個の乳で区分する例が多く、ほかに八個や九個の例がある。外区文様は鋸歯文―複線波文―鋸歯文の三帯構成の例もあるが、外側あるいは内側のいずれかの鋸歯文帯を欠く例が多い。また、内側の鋸歯文帯のかわりに櫛歯文帯あるいはその変形文様帯をおくものがある（245・246・254鏡）。外区の各文様帯の幅は、J群を除くほかの鏡群より広い。鋳造欠陥や補修痕が顕著であるのも特徴である。表1からもうかがえるように、形態的なまとまりがA～Hの各群に比べて弱い。直径にも最大三cmの差があり、ばらつきも大きい。

J群（図7・8）四種五面　主文様はI群とほぼ共通し、体の各部をふくらみで表現する。あまりにも便化した表現のため、神像と

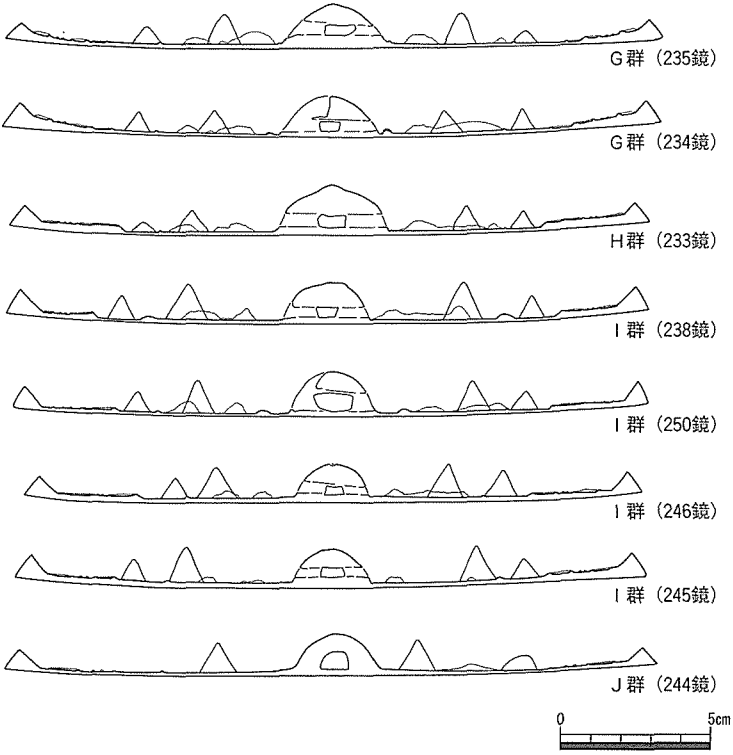

図8　G・H・I・J群の諸例（2）

獣像の区別が困難な例もある。鈕座は円圏座の例と複線波文をめぐらせる例、鈕座のないものがある。内区外周文様帯は、獣文帯あるいは獣文帯を細線で表現したと考えうる文様帯をおく。獣文帯は八あるいは九個の乳で区分する。外区文様帯は二帯で構成され、外側から鋸歯文―複線波文である。鋸歯文は線彫りで表現しただけのものが多いが、浮彫りで内向鋸歯文を表現した例もある（244鏡）。外区の各文様帯の幅はI群と同様に広い。鋳造欠陥や補修痕が顕著である。I群ほどではないが、外区幅、乳高、鈕径にはややばらつきがある。直径も最大一・八cmの差があり、まとまりを欠く。

まとめ　以上のように、区分した各鏡群には、特定の単位文様と文様構成がほぼ対応し、内区外周部および外区の乳のあり方などもこれと符合する。D群のように特異な乳配置や主文様表現から細分可能な鏡群もあるが、形態的な特徴を優位とする分類の有効性を検証できたと考える。なお、形態的なまとまりの様相は鏡群により相違がある。まとまりの強い鏡群がA・B・C・D・E群、それに比してばらつきがあるのがF・I・J群となる。G・H群は直径には差があるけれども各部の形態的特徴は独自性がきわめて強く、かつ鏡群のなかでの形態的な共通性はきわめて高い。

① 文様が分析の視点としては吟味を必要とするものであるという認識は、瓦の研究成果によるところが大きい。【菱田一九八六】など。

② 【森下一九九七、一六頁】。

③ 一口に模倣といっても様々な存在形態がある。三角縁神獣鏡のように、特定の模倣対象ではなく、さまざまな要素を異なる対象から取り込む場合は、文様にたいする機能性の規定がきわめて弱いと考える。また、この時期の鏡が様式的な模倣環境下にあることも【森下一九九八b】。文様に機能性を要求しない要因といえよう。

④ 【田中一九八三】【岸本一九八九】。

⑤ 「仿製」三角縁神獣鏡は、仕上げの研磨が粗雑であるものがほとんどである【森下一九九一、二〇頁】。研磨する部位は、基本的に鏡面と縁部外斜面であり、鈕の研磨を省く例も多い。外区を研磨する例は、京都府寺戸大塚前方部鏡（224鏡）と京都府伝長岡近郊鏡（218鏡）のみである。

⑥ 縁部内斜面に型挽痕を残す例は、舶載・「仿製」をとわず三角縁神獣鏡には多い。いっぽう数は少ないが、鈕に型挽痕を残す例に大阪府茶臼塚鏡（225鏡）、奈良県新山鏡（229鏡）、岐阜県矢道長塚鏡（235鏡）がある。挽型の心棒痕と考える突起は、宮崎県西都原鏡（214鏡）、福岡県一貫山銚子塚鏡（233鏡）、山口県松崎鏡（254鏡）に顕著である。

⑦ 鏡面の反りの発生要因に熱処理を考慮できるとの指摘がある【清水ほか一九九八】【二上古代鋳金研究会二〇〇一】。また、西村俊範は加温による形の修正は容易であると指摘する【西村二〇〇〇、一七七頁】。つまり、熱処理は挽型の形状を保持する段階の鏡を変形させうるという側面をもつ。しかし、製品としての鏡の形態が製作時のイ

メージから大きく乖離するとは考えにくく、その影響はさほど大きくないと推測している。

⑧ 鏡の挽型作成時にすでに文様帯のレイアウトやサイズの設定など基本的な枠組みが決裁されるとの指摘がある【辻田一九九九、八頁】。

⑨ なお、形態にかんする情報を得ることができない241鏡と241―2鏡については以下の検討で取り扱わない。写真による限り、I群と形態的に類似するようにみえ、各鏡が同笵鏡をもたない点も共通する。ただし、主文様表現の差からI群とは異なる系統に属すると考えている。また、201鏡と202鏡は踏み返し技法による製品の可能性があり、その形態は舶載鏡と共通するので、今回の検討からは除外する。【京都大学考古学研究室二〇〇〇】。

⑩ 縁部と外区をそれぞれ別の要素とみなすことは多いが、両者は分離すべき要素ではない。たとえば平縁鏡の場合、両者は同一部分を指す。また、三角縁神獣鏡には後述するように縁部内斜面に文様帯をおく例がある。したがって、製作者は縁部も外区の一部として意識していた可能性がある。そこで、本稿では基本的に段差を隔てて一段高くなる部分より外側を外区とし、さらにその一部を指す場合には、個別に表記する。

⑪ 高さは鏡背面からの高さを計測した。以下、乳も同様である。

⑫ 【小林一九七一】。以下、神獣像配置は同文献による。

⑬ 京都府伝長岡近郊鏡（218鏡）がこの変形形式の例である。伝長岡近郊鏡は内区区画の内側に圏線がめぐる部分があり、異なる鋳型を張り合わせたものと推測されている【八賀一九八四、三七頁】。また、そうした造作により神獣像配置が異例となっているようである。

⑭ 例外としてはここに述べるF群の一部と、D1群の203鏡がある。ただし、203鏡の場合、一体は神像ではなく、脇侍と考えるべきである。

⑮ 鋳型の張り合わせは極端な例であるが、鋳型を補修したと考えられる痕跡は多くの資料に顕著である。文様を彫り込む、きわめて平滑なベース面にたいして、顕著な凹凸のある部分を補修にともなう痕跡と考えている。

第三章　「仿製」三角縁神獣鏡の変遷

前章では、「仿製」三角縁神獣鏡を形態的な特徴から一〇鏡群に分類した。しかし、これのみでは各鏡群間の関係を明らかにすることはできない。従来から、鏡の変化は基本的に原形①からの退化として説明される。製作者集団などの違いに基づく系統差によりその変化の様相は異なる場合もあるが、模倣を起点として製作されたと考えうる三角縁神獣鏡も基本的には同様の変化をたどるであろう②。したがって、「仿製」三角縁神獣鏡の変遷を跡づける作業は、系統差をも考慮しつつ、原形とよびうる三角縁神獣鏡の形態的特徴から遠ざかっていく過程をたどることによって達成されるであろう。

（1）「仿製」三角縁神獣鏡の諸系統とその変遷

先行研究の成果から、三角縁神獣鏡を系統区分するうえでもっとも有効な属性と考えられるのは神獣像表現である。「仿製」三角縁神獣鏡諸鏡群の神獣像表現についてはすでに第二章(3)においてふれており、表現の異同から複数の系統がその製作に関与していたと考えることが可能である。系統区分にあたっては表現、とくに描法の異同を重視した。したがって、神像表現のみが共通し、獣像表現が異なる例でも同じ系統に帰属させる。[3] 以下、系統ごとにその原形となる三角縁神獣鏡をあげ、変遷をうかがう。さらに、「仿製」三角縁神獣鏡全体に適用しうる基準によって各系統の併行関係について整理することにしよう。

系統Ⅰ（A・B・C・D・E・F群） 系統Ⅰの原形とよびうる三角縁神獣鏡はすべて舶載三角縁神獣鏡である。先行研究によれば獣文帯三神三獣鏡（114・115・116・117鏡）、唐草文帯三神二獣鏡（88・90鏡および201鏡踏み返し原鏡）、波文帯三神三獣鏡（131―2・132・133鏡）をその候補としてあげることができる（図9）。[4] これら諸鏡の形態は大きく四分でき、文様構成や主文様表現、面径などほかの要素とも明確に対応する。ここではこれらを仮に原形A～Dとよぶ。系統Ⅰの各鏡群の外区形式には1式～3式がある。1式は原形A、2式が原形B、3式が原形Dとほぼ対応しており、外区形式の明確な時間的前後関係を定めることはできない。乳はいずれも尖乳であり、原形Dのような頂部に丸みを帯びる例はない。[5] そのほかの原形となる三角縁神獣鏡の乳はi式に近い。系統Ⅰの各鏡群でi式をもつのはA・B・C・D群であり、E・F群はいずれもii式である。したがって、乳はi式からii式へと高さが増すという方向で時間的に変化したと考える。鈕にはa式～d式とf式の五形式がある。a式は原形A、b式は原形B、c式は原形Cと近い形態である。d式とf式はいずれも原形との明瞭な対応関係を見出せないが、a・b・c式と比べた場合、d式→f式の順に小さくなる。したがって、原形からの乖離という点からa・b・c式→d式→f式へと小型化という方向で鈕が変化したとひとまず想定しておく。なお、乳に

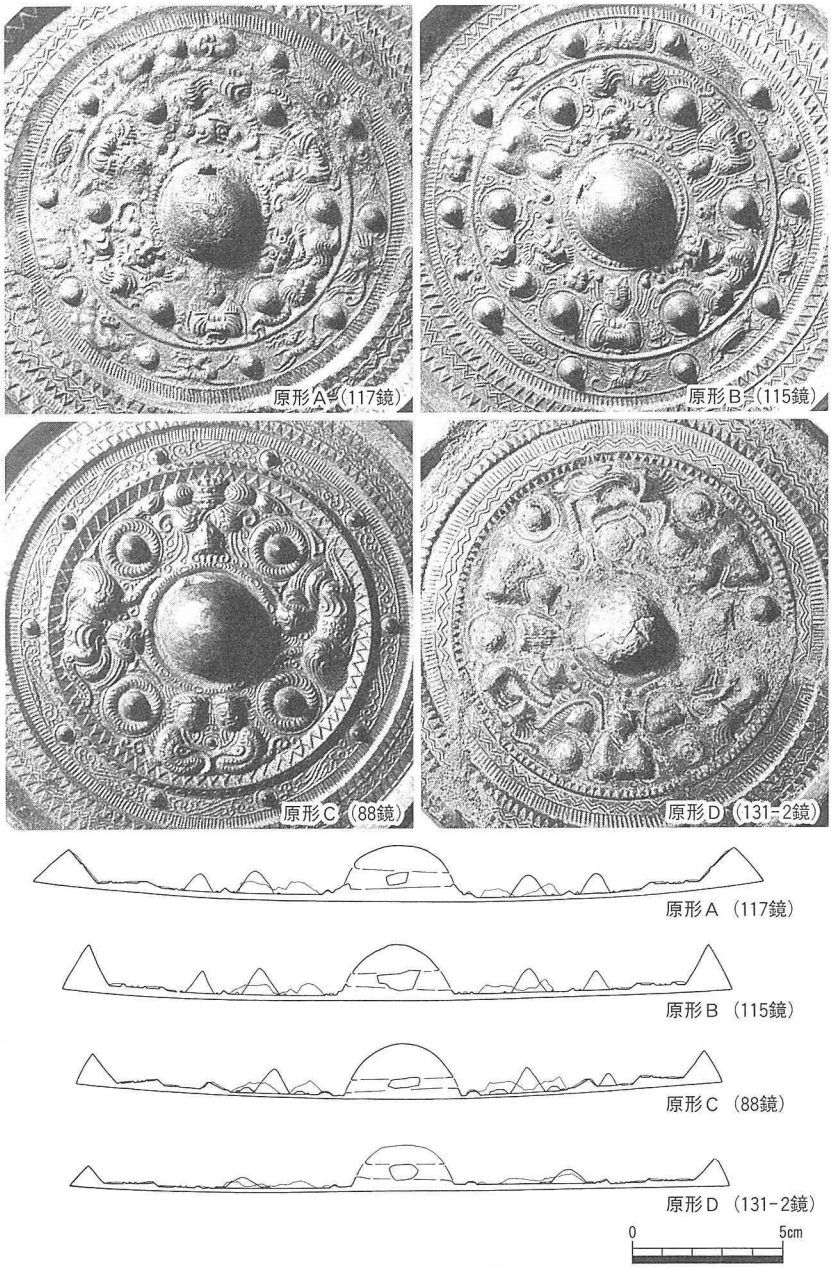
原形A（117鏡）
原形B（115鏡）
原形C（88鏡）
原形D（131-2鏡）
原形A（117鏡）
原形B（115鏡）
原形C（88鏡）
原形D（131-2鏡）
0
5cm

図9　系統Ⅰの原形

ついてi式からii式への推移を導き出したが、これは鈕のa・b・c式→d式という推移とも対応し、鈕が小型化の方向で変化したとする想定と矛盾しない。なお、内区区画はいずれも界圏であり、差がない。

以上の分析から、系統ⅠはA・B・C・D群→E群→F群の三段階に整理できる。なお、D2群はD1群より縁部と鈕が小さい傾向にある。したがって、鈕の形態変化がD1群からD2群への推移のなかですでに小型化の方向で進行した可能性は高く、縁部の小型化も時間的な変化にともなうと考えてよいだろう。

つぎに、想定した変遷を文様から検証する。まず、松毬形（まつかさがた）とよばれる図文をとりあげよう。系統Ⅰにみられる松毬形は小林分類のi式とii式である。i式は図文内を線表現により三区分して中央に珠点をおくもので、ii式は図文内の区分がなくなるものである。図文の形骸化からi式からii式へ変化したと想定できる。[6] 松毬形i式はA・B・C・D群に、松毬形ii式はE群に主体的である。F群では、松毬形が本来配置される内区の乳内側にはなく、内区外周文様帯などに挿入される。いずれもii式であるが、文様を配する位置に変化があり、E群より時期が下ると考えうる。なお、D2群には松毬形ii式をもつ例が存在することから、形態の分析でも推測したようにA・B・C・D1群より併行期間をおきつつ相対的に新しいとみて誤りなかろう。このほか、時間的な変化を反映した要素として、頭部を横向きにする獣像の下顎表現をあげうる。下顎が二重に表現されたものから一重表現のものへと簡略化したと想定できる。[7] A～D群は下顎二重表現、E・F群は下顎一重表現を主体とする。このように、先に想定した形態の変化は、文様の変遷とも矛盾しない。

系統Ⅱ（G・H群） 系統Ⅱの原形は舶載三角縁神獣鏡には見出せない。先行研究によれば、文様構成などから系統Ⅰに属すいずれかの「仿製」三角縁獣文帯三神三獣鏡がその候補である可能性が高い。[8] 系統Ⅱに属す「仿製」三角縁神獣鏡はG群とH群である。これらの外区は4式と5式であり、縁部の大きさという点では3式にもっとも近い。しかし、外区形態全体をみると、4・5式ともに3式より大きくかけ離れており、4式と5式を順序づけることはできない。むしろ、それぞれは独自性が強いと評価できる。鈕も両者の形態差が顕著であり、外区と同様にそれぞれ形態の独自性が強い。乳は、

G群がⅰ式とⅱ式を、H群がⅲ式をもつ。しかし、その変化の方向は定かではなく、G群が底径の大きい乳を、H群が底径の小さい乳を採用するという鏡群ごとの特色とみなすことも可能である。なお、内区区画はともに円圏で、差がない。

いっぽう、文様からは両者の先後関係をうかがえるのであろうか。松毬形は放射状に突線を配し、下半部に大きな斜面をもつ小林分類のⅲ式をともに採用する。このほかの文様属性においても両鏡群を順序づけることはできない。G群とH群は、神像表現が共通しながらも、形態や文様構成はそれぞれ独自のものである。したがって、単位文様の互換性から両鏡群はおおむね併行関係にあり、かつその違いは時間的関係に無関係な原形を異にする型式系列の差である可能性が高いと結論づけることができよう。

系統Ⅲ（I・J群） 系統Ⅲの原形はその文様構成から、「仿製」三角縁獣文帯三神三獣鏡とみてよい。しかし、系統Ⅲの諸例はいずれも形態・文様ともに個体差が著しく、原形を特定することは困難である。外区はI群が6式、J群が7式である。6式と7式はともに、縁部もきわめて小ぶりで、外区文様帯の幅も広い。両形式の決定的な差は、内区と外区の境界にある段差の有無である。7式以外のすべての外区形式は例外なく内区と外区の境に段差をもつことから、段差のある6式から段差のない7式へという推移を想定できる。乳はI群ではⅰ式とⅱ式が混在するのにたいし、J群はⅱ式のみとなっており、ⅱ式へと収斂したととらえることが可能である。鈕もI群がf式とc式をもち、J群はf式のみとなり、乳の変化と同様の説明が可能であろう。したがって、系統ⅢではI群からJ群へと推移したと考えることができる。内区区画は両群ともほぼ同じ様相を示す。

つぎに、この想定を文様から検証する。I群のなかには松毬形と判断できる図文が存在するのにたいし（239・240鏡）、J群では松毬形がない。また、I群は外区文様帯を三帯とするものが半分程度であり、J群はすべて二帯である。松毬形の消滅、外区文様帯数の減少は、ともに末消的な要素ではあるが、同一系統に属する鏡群間においては時間的な変化にともなうととらえて差し支えないであろう。したがって、想定した形態の変化は妥当なものと考える。

小結　以上のように、「仿製」三角縁神獣鏡の諸系統は、それぞれ異なる変化の様相を示すことが明らかとなった。系統をこえてみとめられる全体的な変化としては、すでに指摘されている外区の扁平化や乳の大型化とともに、[9]縁部・鈕の小型化といった方向性をうかがうことができる。しかし、こうした変化がすべての系統において一律にみとめられるわけではない。形態差には、時間的な変化を示すものと型式系列の差を反映するものの双方が存在することに留意しておきたい。

(2)　系統間の併行関係と共伴関係による検証

前節では、「仿製」三角縁神獣鏡を大きく三つの系統に区分し、それぞれの系統のなかでの変遷をうかがった。ここでは、「仿製」三角縁神獣鏡全体に適用できる基準から、各系統の併行関係を定め、「仿製」三角縁神獣鏡の編年を試みる。

系統間の併行関係　「仿製」三角縁神獣鏡は製作者集団が異なる大きく三つの系統により製作されたと考えることができる。しかし、三者は決して没交渉ではなく、互いにある程度の関連を有していた可能性が高い。というのは、系統を異にしながらも、「仿製」三角縁神獣鏡は、縁部の断面形態や直径、全体の文様構成、鈕孔形態、研磨などの製作技法[10]の共通性が高いからである。

そこで、筆者が併行関係を定める手がかりとして注目したいのは、内区外周部と外区の文様構成である。なぜなら、「仿製」三角縁神獣鏡は外区を鋸歯文帯―複線波文帯―鋸歯文帯（以下、鋸波鋸と略す）で構成するものがほとんどであり、かつその内側に内区外周文様帯をめぐらすのを基本とするからである。こうした観点から各系統の内区外周部と外区の文様構成をみると、系統Ⅰでは鋸波鋸櫛獣（唐）から鋸波鋸獣へと、E群とF群の間で櫛歯文帯が脱落するという変化のあることがわかる（図5・6）。系統Ⅱは鋸波鋸櫛獣であるものの、H群では櫛歯文帯の位置が外区に移動していることから、系統Ⅰのもっとも新しい鏡群までは下らない時期の所産であると想定できる。系統Ⅲはいずれも櫛歯文帯がない鋸波鋸獣

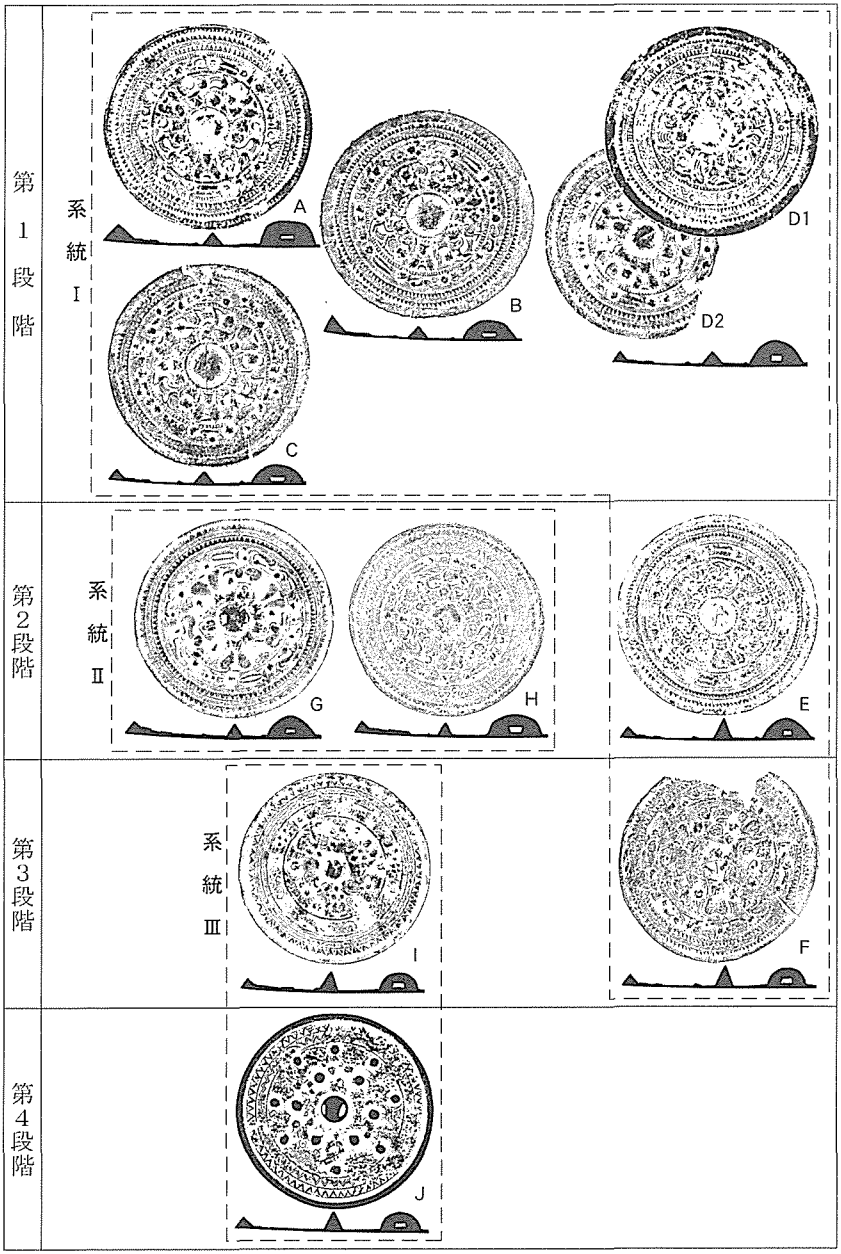

図10 「仿製」三角縁神獣鏡の変遷（拓本S＝1/8，断面模式図S≒1/5）

であり、系統Ⅰのもっとも新しい段階とほぼ同じころに製作が始まったと推測できよう。

共伴関係による検証　これまでの分析により得られた各系統の変遷と併行関係を整理した編年試案を図10に示す。さらに、この編年試案の妥当性を古墳（一部、祭祀遺跡を含む）における共伴関係から検証する。副葬や廃棄に至るまでの不確実性により、鏡の新古がそのまま古墳や遺跡の新古に結びつかない可能性に留意しなければならないが⑪、ある程度の傾向をつかむことは可能であろう。なお、分析に際し、同一古墳での複数埋葬主体の共伴例は個別にあつかう。

「仿製」三角縁神獣鏡同士の共伴例は表2にあげた一五例である。共伴状況をみると一五例のうち一一例が同一段階の資料のみで構成される。隣接段階にまたがるものが三例で、あいだに段階をはさむものはわずか一例である。また、系統ⅡのG・H群が系統ⅠのE群と共伴する例が多いという事実は、両者が併行関係にあり、かつ系統を異にする可能性を強く示す。さらに、系統Ⅰの第1段階は系統Ⅲと共伴する事例がわずかであり、両者には明確な時期差が存在すると考えてよいだろう。このように、提示した編年試案はその妥当性を共伴関係からも無理なく説明することが可能であり、古墳における共伴関係とも明確な対応関係を示すことから、「仿製」三角縁神獣鏡は基本的に製作後きわめてスムーズに

表2　「仿製」三角縁神獣鏡の共伴関係

出土古墳	段階	1				2			3		4
	系統	Ⅰ				Ⅰ	Ⅱ		Ⅰ	Ⅲ	Ⅲ
	鏡群	A	B	C	D	E	G	H	F	I	J
大阪府御旅山古墳			2	1	1						
大阪府紫金山古墳		1		1	6						
奈良県新山古墳				1	1						
山口県長光寺山古墳					3						
岡山県鶴山丸山古墳					2(1)						
奈良県新沢500号墳					2(1)						
京都府百々ヶ池古墳					1	1					
愛知県出川大塚古墳						2					
岐阜県矢道長塚古墳西棺					1		1				
福岡県一貫山銚子塚古墳						6		2			
大阪府ヌク谷北塚古墳								2			
佐賀県谷口古墳西石室							2				
佐賀県谷口古墳東石室							1	1			
福岡県沖ノ島18号遺跡						(1)	1		2		
福岡県沖ノ島17号遺跡					1						2

〔凡例〕　（　）は伝承・推定資料の数を示す。

配布・副葬されたと考えることができる。⑫

① 以下で使用する「原形」は必ずしも模倣行為にともなう「模倣型式」に対比しうる用語ではない。「模倣型式」と対比すべき用語は「原型式」であり、「モデル」という用語に置換できる。本稿で用いる「原形」は系統の相違を問題にしない。したがって、同一系統内での変化の場合でもこの用語を用いる。

② 【西村一九九八】など。

③ 系統差を導き出すためには、表現の違いのなかでも、そのクセに着目すべきと考える。したがって、単純に各部位の表現が異なっていても、共通する細部表現のクセがあれば同一系統に属させるべきであろう。

④ 獣文帯三神三獣鏡（114・115・116・117鏡）、唐草文帯三神二獣鏡（88・90鏡および201鏡踏み返し原鏡）を「仿製」三角縁神獣鏡と関連が深いと指摘したのは、近藤喬一である【近藤一九七三】。なお、波文帯三神三獣鏡（131―2・132・133鏡）が「仿製」鏡と深く関連することは、別稿で神獣像表現の共通性から指摘した【岩本二〇〇一a、六三頁】。

⑤ 図示した原形Dの例では乳が丸みを帯びるものであるが、そのほかの132・133鏡は尖乳であり、乳-i式に近い。131―2鏡は例外的な存在である。

⑥ 【小林一九七六、三九六―三九八頁】。

⑦ 【岸本一九八九、三八頁】。

⑧ 【近藤一九七三、九頁】。ただし、系統Iとの関係だけでは説明のつかない部分も多い。G群にみる獣像肩部の巴文状文様や、乳下部の雲文は、舶載斜縁神獣鏡と類似する文様である。したがって、系統IIの成立にはほかの鏡種からの影響を考えることも可能である。

⑨ 【新納一九九一】。

⑩ 「仿製」三角縁神獣鏡の仕上げの研磨が、基本的には鏡面と縁部外斜面に限られることはすでに述べた。

⑪ 古墳時代の鏡がしばしば伝世することは、森下章司が具体例をあげて指摘している。またそうした現象自体が古墳時代の鏡の意義を特徴づけるものであり【森下一九九八a】、この点にとくに留意しなければならない。

⑫ 「仿製」三角縁神獣鏡の古墳における共伴状況をみると、舶載三角縁神獣鏡よりも同じ段階の鏡同士でまとまる傾向が非常に強い。

第四章　「仿製」三角縁神獣鏡の生産とその展開

（1）　舶載三角縁神獣鏡から「仿製」三角縁神獣鏡へ

「仿製」三角縁神獣鏡製作の起点は、その名称にも表れているように、舶載三角縁神獣鏡の忠実な模倣にあると説明さ

れる。そのいっぽうで、舶載三角縁神獣鏡と「仿製」三角縁神獣鏡が型式学的に連続するという指摘もあり、[1]その具体像の再検討が必要である。そこでまず、舶載三角縁神獣鏡と「仿製」三角縁神獣鏡の関係について考察を試みたい。

第1段階に位置づけられる「仿製」三角縁神獣鏡にはA・B・C・D群の四群があり、すべて系統Ⅰに属す。これらの鏡群の差は、松毬形という時間的に変化する単位文様の同一型式を共有することから、併行関係にある型式系列の差とみなすことが可能である。系統Ⅰに属す「仿製」三角縁神獣鏡の原形と推測される四鏡種は、主文様表現を異にする三つの系統に整理でき、[2]かつ同一系統内での系列差をも含む。とくに、別稿でもとりあげたように、系統ⅠなかでもA・B・C群の主文様表現は細部に若干の省略がみとめられるものの、[3]原形Dとほぼ同じである。この評価と、A・B・C・D群を一系統的にとらえることが可能であるという本稿での分析結果を総合すれば、舶載三角縁神獣鏡に属す原形Dと「仿製」三角縁神獣鏡のA・B・C・D群が帰属する系統Ⅰを、大きくは一つの系統とみなすことができるのである。[4]

ここで確認しておきたいのが、原形と推測される舶載三角縁神獣鏡と「仿製」三角縁神獣鏡の時間的関係である。舶載三角縁神獣鏡を共伴関係から整理した森下章司の区分によると、原形と推測される舶載三角縁神獣鏡はすべてもっとも新しい鏡群に含まれる。[5]さらに、筆者も一部の仿製鏡と三角縁神獣鏡との古墳における共伴関係を検討し、舶載三角縁神獣鏡と「仿製」三角縁神獣鏡との時間的関係を連続的にとらえることが可能であり、型式学的な検討の結果とも矛盾しないことを述べた。[6]したがって、ここで示した「仿製」三角縁神獣鏡と舶載三角縁神獣鏡が系統的なつながりを有していたという見方を考慮すれば、両者の関係は同一系統内での型式学的に連続する変化としてとらえることができる。ただし、その変化は決してスムーズではない。「仿製」三角縁神獣鏡製作の初期段階に属す鏡群はすべて一つの系統ととらえることが可能であるが、製作された鏡にはさまざまなバリエーションがある。とくに、D1群の唐草文帯や神獣像表現に顕著なように、あえて系統を異にする舶載三角縁神獣鏡の神獣像のモチーフや文様構成を複合させ、さらには外区に乳を添加するといった独自のアレンジも加えている。そのいっぽうで、系統的なつながりのある舶載三角縁神獣鏡に固有の微細な特

徴は、外区の形態と神獣像表現以外にはほとんどみとめることができない。

なお、第2段階および第3段階で系統Ⅰに属すE・F群は、D群と同様に頭を横に向ける獣像を主文様にもつことから、これらは一連の変化を示す系列的関係にあると判断できる。このD・E・F群からなる系列は全体の半数近くと生産量も多く、また長期にわたり製作されたことからも、「仿製」三角縁神獣鏡の中心的な系列であったことはまちがいない。この中心的な系列は、製作当初にあたるD1群では系統を異にする舶載三角縁神獣鏡（原形C）の特徴が目立つが、D2群に至ると二種類あった主文様の神像をそのうちの一種類にし、あわせて内区外周文様帯の唐草文帯を獣文帯に切り替える。すでに述べたように、D2群は第1段階のそのほかの鏡群よりも相対的に新しく位置づけられる可能性が高いことから、そうした現象は系統Ⅰのなかでの系列の統合の結果と想定できる。後に続く鏡群がD2群の系譜を引くE・F群であることも、この想定と合致する。また、D2群の出現をもって「仿製」三角縁神獣鏡の定型化と評価できよう。

以上のように、「仿製」三角縁神獣鏡は、舶載三角縁神獣鏡と系統的なつながりをもつとともに、時間的関係から型式学的に連続するものと考えてよい。また、その定型化は第1段階のうちに達成されたと考えられるが、製作当初には多数の系列が存在した。しかも、そうした多数の系列を一系統的にとらえることが可能であるという点に大きな特色がある。これらの系列は、舶載三角縁神獣鏡の諸要素を複合させながら改変を加えることで生み出されており、「仿製」三角縁神獣鏡と舶載三角縁神獣鏡とのあいだには型式的な差があると考えることが可能である。

(2) 形態からみた「仿製」三角縁神獣鏡とその製作動向

「仿製」三角縁神獣鏡の製作動向を考察するにあたり、まず群別した各鏡群のあり方を形態という観点から整理しておきたい。第二章(3)では各鏡群の記述に際して、直径も参考にしながら形態的なまとまりの様相について述べた。そこでの分析結果を参照すると、まとまりの強い鏡群がA・B・C・D・E・G・H群、まとまりの弱い鏡群がF・I・J群と

なる。とくに、D群は直径が二四cm程度のものと二一・五cm程度のものがあるが、それぞれのなかでの凝集性はきわめて高い。いっぽうI群は直径に最大三cmの差があり、そのなかでも個々の資料にはばらつきがある。このように、形態の共通性の度合いは直径の凝集性ともおおむね相関するとともに、鏡群によってその様相にはかなりの差があるのである。さらに、本稿でとりあげた「仿製」三角縁神獣鏡に限れば、各部の形態的特徴が一致する、すなわち形態的なまとまりが強い鏡群には特定の単位文様とその構成が対応する傾向がきわめて強く、鏡群のなかでの個体差は小さい。また、系統を同じくする鏡群であっても、それぞれの独自性は強い。例えば、系統ⅡのG・H群は、単位文様に共通するものを採用しながら、形態にはそれぞれ独自性が顕著である。こうした形態面の差と対応するのは内区主文様の獣像の一部などごく細部の特徴のみであり、意図的に両者をつくり分けていたとみなすことが可能である。以上の点を整合的に理解すると、「仿製」三角縁神獣鏡にはそれぞれの鏡群に対して確固たる規格というものが存在し、かつその形態の共通現象は製作上の規格性の強さに結びついている可能性が高いといえる。また、鏡の形態の異同は、製作時にイメージされる、あるいは決定される製品の規範の差をも反映しているとみなしうるであろう。また、そうした規範のあり方が、鏡の製作にあたった製作者ないしは製作者集団のおかれた状況と密接な関係にあることも推測できよう。

それでは、これまでの分析結果をもとに、「仿製」三角縁神獣鏡の製作動向を復原してみたい。第1段階には、A・B・C・D群という四つの鏡群が存在したが、すべて系統Ⅰに属す。いずれの鏡群も形態的なまとまりは強く、規格的な鏡群が併行して存在していたと理解できる。出土面数をみると、第1段階全体で一七種四九面と全体の四割強を占め、この段階すなわち「仿製」三角縁神獣鏡製作の初期に生産のピークがあることを指摘できる。ついで、第2段階にはE・G・H群の三つの鏡群が存在した。系統Ⅰに帰しうるのはE群のみであり、残るG・H群は系統Ⅱに属す。系統ⅠのE群は形態のまとまりが強く規格的であり、系統ⅡのG・H群も形態の共通性は高い。生産量は第2段階全体で一五種四三面と「仿製」三角縁神獣鏡のなかでは比較的安定した生産がおこなわれたようである。系統ごとの出土面数の内訳をみると、

系統Ⅰが一〇種二六面、系統Ⅱが五種一七面である。第3段階にはF・I群の二つの鏡群が存在し、それぞれ系統Ⅰと系統Ⅲに帰属する。ともに、形態的なまとまりが非常に弱い。系統ごとの出土面数は、系統Ⅰが五種五面、系統Ⅲが一三種一六面となり、系統Ⅰの生産量は激減し、かわって系統Ⅲが比較的活発な生産をおこなったと考える。出土面数は第3段階全体で一八種二一面と半減する。三角縁神獣鏡の最大の特徴の一つである同笵鏡をもつ例もわずかとなる。ただし、鏡種の総数にはほとんど変化がない。第4段階には、系統Ⅲに属すJ群のみが存続する。形態的なまとまりが弱く、出土面数はわずかに四種五面となり、低調な生産状況であったと想定できる。

また、鏡群という枠組みにおいてみられる、特定の形態に特定の文様が対応するという現象は、「仿製」三角縁神獣鏡のなかでは決して異例ではなく、系統をこえたより大きな次元で共有された生産面の特徴であったと考えることができる。こうした現象が規格性の強さと結びついている可能性が高いことはすでに述べたとおりである。「仿製」三角縁神獣鏡の製作のあり方を規格性という観点から段階ごとに追ってみると、第1段階には細部に至るまで形態的特徴を同じとするきわめて規格的な製品が生産され、第2段階では第1段階での規格性を強く保持する。ところが、第3段階に至ると「仿製」三角縁神獣鏡全体が急激に規格性を喪失してゆき、ついには第4段階で終焉を迎える。第4段階の例には、各文様帯の割り付けを同心円分割によっていたとは考えにくい製品もあり（247鏡）、製作のあり方が大きく変容した可能性をうかがわせる。生産量の推移をみても、第1段階と第2段階には大きな差はなく、第3段階で半減し、第4段階ではほとんど生産されなくなる。また、第1・2段階の強い規格性をもつ鏡群が、それぞれのなかで連続的かつ集約的に製作された可能性は高い。これに対して、第3段階以降の形態的な個体差が比較的顕著な鏡群は、断続的かつ散発的な製作状況であった可能性を考慮できる。とくに、散発的な生産のあり方はその需要の低さを反映していると推測でき、集約的な生産はその需要の高さを反映するものと考える。生産量の推移もこの変化と明瞭に対応しており、「仿製」三角縁神獣鏡の需要は第3段階において急速に下降したとみなしうるであろう。

製作動向において特徴的な点としては以下の二点をあげることができる。一点目は、第1段階にもっとも多くの鏡群が併行して存在しているにもかかわらず、それらはすべて同じ系統に属する点である。二点目が、第3段階での規格性の喪失はそれ以前のあり方とは大きく異なると同時に、総数は少ないながらも実にバラエティに富む鏡を生み出した点である。この二つの様相は多様であるという点でいっけん共通性があるようにも思えるがそうではない。第1段階が形態的特徴により多くの鏡群が存在し、かつ鏡群ごとに強い規格性を保持しつつも系統的には同じであるのにたいし、第3段階は鏡群が数少ないにもかかわらず、それぞれの鏡群のなかでの個体差は顕著である。すなわち、この二つの様相は規格性という点ではまったく対極にあるのである。第3段階での変化は「仿製」三角縁神獣鏡のなかでの大きな画期とみなすことが可能であろう。鋳造不良の例が顕著にみられるようになるのもこの段階であり、製作技術の変化とも符合する。

こうした差がうまれた背景には、「仿製」三角縁神獣鏡にたいする作鏡姿勢の相違を想定できる。とりわけ、「仿製」三角縁神獣鏡がその製作当初において強い規格性を帯びた背景には、「仿製」三角縁神獣鏡という枠組みのなかでの内的な変化というよりも外的な影響を考えるのが妥当ではないだろうか。第3段階における変化についても同様の説明が可能であろう。第3段階における大きな変化は、系統を異にする鏡群でも同様にみとめることができる。この事実は、そうした変化が系統という枠組みをこえたレベルでおこったものであったことを示す。あるいは、これらの変化の背景には、鏡の製作管理体制との強い結びつきを想定することも可能であるかもしれない。もしそのように考えてよいのであれば、「仿製」三角縁神獣鏡は、舶載三角縁神獣鏡の製作にたずさわった製作者ないしは製作者集団を動員し、生産組織の再編成をおこなったうえで厳しい管理のもと規格的に生産され始めたものの、生産の後半期にはそうした体制が大きく変容したと推測できるであろう。

① 【新納一九九一、一八三頁】【車崎一九九九】など。

② 【岸本一九八九】。

③ 「仿製」鏡は舶載鏡に比べて、神像の肩から伸びる雲気の立体感がなく、獣像尾部の獣毛表現も簡略化している。

④　なお、原形Ｄの岸本表現⑬をもつ舶載三角縁神獣鏡は波文帯に限られるが、「仿製」鏡のＤ１群に波文帯を組み込む例（204鏡）がある。

⑤　【森下一九九八ｂ・ｃ】。

⑥　【岩本二〇〇一ａ】。

おわりに

本稿では、形態という視点から「仿製」三角縁神獣鏡について考察を試みた。また、鏡にみる形態の共通現象が規格の強さと結びついていることを示し、そうした規格がひいては鏡の製作時にイメージ、あるいは決定される規範のあり方をも反映している可能性が高いと考えた。その結果、「仿製」三角縁神獣鏡の製作動向をより具体的に論じることが可能となり、その特質をある程度明らかにしえたと考える。これまで「仿製」三角縁神獣鏡は、一系統的かつ類型的なものとして評価されがちであった。しかし、類型的と評価されてきた「仿製」三角縁神獣鏡の製作にも製作者ないしは製作者集団を異にする複数の系統が関与し、異なる規格に基づいた複数の鏡群を併行して生産していたことが明らかとなった。

また、舶載三角縁神獣鏡から「仿製」三角縁神獣鏡への移行が系統的なつながりのある型式学的な変化であるとともに、両者には型式的な差が存在することを再確認した。とりわけ、「仿製」三角縁神獣鏡において主体的かつ継続的に生産をおこなった系統が舶載三角縁神獣鏡の「陳氏作鏡群①」の流れを汲むことは、その生産体制を考えるうえできわめて重要である。

あらためて「仿製」三角縁神獣鏡の製作動向を振り返ると、製作当初においては多数の系列が併行して存在した。とりわけ、そうした多数の系列を一系統的にとらえることが可能であるという点が重要である。その背景には、再編された生産組織が、複数の規格的な鏡を製作する必要性のある状況におかれていた可能性をうかがうこともできよう。その後、複数の系統が製作に関与しつつ「仿製」三角縁神獣鏡の生産は安定し、規格的な鏡を生産する。そして、第3段階に至ると、それまで保持されていた規格性が急速に失われるとともに生産量も激減する。

とくに、本稿で示した第3段階における大きな変革は、三角縁神獣鏡の終焉に向けての動きと無関係ではなく、「仿製」という枠組みをこえた三角縁神獣鏡全体の画期としてとらえる必要がある。また、その様相を明らかにすることは、古墳時代前期社会の動向だけでなく、三角縁神獣鏡自体の意義を考えるうえでも重要と考える。第3段階に位置づけられる資料は、前方後円墳から出土することがほとんどないという点で、前段階とは大きく様相を異にする。ほかの副葬品などから、その副葬時期は帯金をもつ甲冑の出現以降と想定できる。にもかかわらず、古墳時代中期を代表する副葬品である帯金式甲冑と第3段階以降の「仿製」三角縁神獣鏡が共伴した例はこれまでに確認されていない。帯金式甲冑を代表とする新たな副葬品体系が確立し、三角縁神獣鏡の威信財としての意義は大きく下降したと想定できるが、それでもなお三角縁神獣鏡がこれまでとは異なる価値体系のなかで一定期間存続していた可能性があろう。[2]

また、鏡の形態が反映する生産の一側面は、そのほかの鏡と比較することでより一層明確になるはずである。この点についても、今後の検討課題としたい。

① 【岸本一九八九】。舶載三角縁神獣鏡の中心的な鏡群も、製作期間や生産量からみて、やはり陳氏作鏡群であると考える。陳氏作鏡群は三角縁神獣鏡製作において非常に大きな影響力を有していたと推測できる。

② ここで述べた三角縁神獣鏡の終焉の様相にかんする考察は、論証が不十分な部分が多い。紙幅の都合から詳細については、現在準備中の別稿で論じる予定である。

【謝辞】 本稿は二〇〇〇年一月に京都大学大学院文学研究科に提出した修士論文「三角縁神獣鏡の編年と前期古墳」の一部をもとに、大幅に改稿したものです。修士論文作成にあたっては、京都大学大学院文学研究科上原真人教授・山中一郎教授・清水芳裕助教授に懇切なご指導を賜りました。阪口英毅助手、大賀克彦氏をはじめとする京都大学考古学研究室のみなさまには、数多くの有益なご助言をいただいてまいりました。また、森下章司氏と車崎正彦氏には日頃よりさまざまなご教示や機会をいただき、資料収集にあたっては惜しみないご助力を賜りました。秋山進午先生をはじめとする大手前大学史学研究所のみなさまからも日々さまざまな刺激をいただいております。なお、資料調査の過程で以下の方々・諸機関から格別なご高配を賜りました（敬称略・五十音順）。末筆ながら記して感謝申し上げます。ありがとうございました。

新井悟　砂澤祐子　一瀬和夫　井口喜晴　魚津知克　大山光悦　小高春雄　小野友記子　笠野毅　梶山勝　菊地芳朗　黒沢浩　桑野一幸　小池和榮　定森秀夫　佐藤利秀　杉山晋作　清喜裕二　清家章　妹尾周三　高橋克壽　高橋照彦　田端基　千賀久　辻健二郎　都出比呂志

徳田誠志　砥綿茂全　中井正幸　中島雄二　長濱和之　長森康次　難波洋三　西村俊範　福永伸哉　藤原郁代　松本肇　真野和夫　三村直一　宮川禎一　宮本佳典　吉田正人　渡辺英明　飯田市教育委員会　伊万里市歴史民俗資料館　宇部宮神社　宇部市教育委員会　大分県立歴史博物館　大阪大学文学部考古学研究室　大阪府立近つ飛鳥博物館　加古川市教育委員会　加古川総合文化センター博物館　柏原市立歴史資料館　可児市教育委員会　京都国立博物館　京都大学総合博物館　京都文化博物館　宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査室　黒川古文化研究所　五島美術館　小牧市教育委員会　白鳥神社　園部町教育委員会　園部文化博物館　大中寺　知恩院文化財保存局　千葉県立上総博物館　天理大学附属天理参考館　名古屋市博物館　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　奈良国立博物館　新田神社　東広島市教育委員会　福島県立博物館　宗像大社神宝館　明治大学考古学博物館　栗東歴史民俗博物館　和田山町教育委員会

引用文献

・紙幅などの都合から、表2に引用した古墳等にかかわる一次文献を割愛した。ご了承いただきたい。

今津節生　二〇〇〇　「三角縁神獣鏡の湯口――鋳造欠陥から湯口を推定する――」『大古墳展――ヤマト王権と古墳の鏡――』　東京新聞社、一三二―一三三頁。

岩本　崇　二〇〇一a　「三角縁神獣鏡と寺戸大塚古墳出土鏡の組み合わせ」『寺戸大塚古墳の研究』Ⅰ　前方部副葬品研究篇　財団法人向日市埋蔵文化財センター、六一―六七頁。

岩本　崇　二〇〇一b　「伝福岡県二丈町付近出土の「仿製」三角縁神獣鏡」『古代文化』第五三巻第六号　財団法人古代學協會、三二―三八頁。

大阪府教育委員会　一九七一　『南河内石川流域における古墳の調査』　大阪府文化財調査報告第二二集。

大塚初重・小林三郎　一九六二　「佐賀県唐津路寺古墳」『考古学集刊』第四冊　東京考古学会、五三―六六頁。

岸本直文　一九八九　「三角縁神獣鏡製作の工人群」『史林』第七二巻第五号　史学研究会、一―四三頁。

岸本直文　一九九五　「三角縁神獣鏡の編年と前期古墳の新古」『展望考古学』考古学研究会四〇周年記念論文集、一〇九―一一六頁。

京都大学考古学研究室　二〇〇〇　「三角縁神獣鏡目録」『大古墳展――ヤマト王権と古墳の鏡――』東京新聞社、二四八―二五四頁。

車崎正彦　一九九九　「副葬品の組み合わせ―古墳出土鏡の構成――」『前方後円墳の出現』　雄山閣出版、五三―七四頁。

車崎正彦編　二〇〇二　『考古資料大観』五　弥生・古墳時代鏡　小学館。

小林行雄　一九五五　「古墳の発生の歴史的意義」『史林』第三八巻第一号　史学研究会、一三五―一五九頁。

小林行雄　一九七一　「三角縁神獣鏡の研究――型式分類編――」『京都大学文学部紀要』第一三（小林行雄　一九七六　『古墳文化論考』　平凡社、三〇三―三七七頁に加筆のうえ再録）。

小林行雄　一九七六　「仿製三角縁神獣鏡の研究」『古墳文化論考』　平凡社、三七九―四二九頁。

近藤喬一　一九七三　「三角縁神獣鏡の仿製について」『考古学雑誌』第五九巻第二号　日本考古學會、一―二八頁。

澤田秀実　一九九三　「三角縁神獣鏡の製作動向」『法政考古学』第一九集　法政考古学会、一七―三七頁。

清水康二・三船温尚・清水克郎　一九九八　「鏡の熱処理実験――面反りについて（その1）――」『古代学研究』第一四四号　古代学研

究会、四一―五一頁。
田中　琢　一九八三　「方格規矩四神鏡系倭鏡分類試論」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立三〇周年記念論文集、八三―一〇四頁。
辻田淳一郎　一九九九　「古墳時代前期倣製鏡の多様化とその志向性」『九州考古学』第七四号　九州考古学会、一―一七頁
新納　泉　一九九一　「権現山鏡群の型式学的位置」『権現山51号墳』『権現山51号墳』刊行会、一七六―一八五頁。
西村俊範　一九九八　「写された神仙世界」『月刊しにか』第九巻第二号　大修館書店、八六―九四頁。
西村俊範　二〇〇〇　「錫青銅の熱処理について」『史林』第八三巻第五号　史学研究会、一五八―一八二頁。
二上古代鋳金研究会　二〇〇一　「鏡の熱処理実験――面反りについて（その2）――」『古代学研究』第一五四号　古代学研究会、一―一七頁。
八賀　晋　一九八四　「仿製三角縁神獣鏡の研究――同笵鏡にみる笵の補修と補刻――」『学叢』第六号　京都国立博物館、三―五六頁。
原田大六　一九六一　「十七号遺跡の遺物」『続沖ノ島』宗像神社復興期成会、二八―一四七頁。
菱田哲郎　一九八六　「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』第六九巻第三号　史学研究会、一―三八頁。
福永伸哉　一九九一　「三角縁神獣鏡の系譜と性格」『考古学研究』第三八巻第一号　考古学研究会、三五―五八頁。
福永伸哉　一九九二　「仿製三角縁神獣鏡分類の視点」『長岡京古文化論叢』Ⅱ　中山修一先生喜寿記念事業会、四九一―五〇〇頁。
福永伸哉　一九九四a　「仿製三角縁神獣鏡の編年と製作背景」『考古学研究』第四一巻第一号　考古学研究会、四七―七二頁。
福永伸哉　一九九四b　「三角縁神獣鏡の歴史的意義」『倭人と鏡その2』第三六回埋蔵文化財研究集会、三四九―三五八頁。
三木文雄　一九六六　『埴輪・鏡・玉・剣』日本原始美術六　講談社。
明治大学考古学博物館　一九八八　『鏡　明治大学考古学博物館蔵品図録1』。
森下章司　一九九一　「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第七四巻第六号　史学研究会、一―四三頁。
森下章司　一九九三　「仿製鏡の変遷」『季刊考古学』第四三号　雄山閣出版、六四―六七頁。
森下章司　一九九七　「三角縁神獣鏡と前期古墳」『考古学ジャーナル』No四二二　ニューサイエンス社、一四―一八頁。
森下章司　一九九八a　「鏡の伝世」『史林』第八一巻第四号　史学研究会、一―三四頁。
森下章司　一九九八b　「古墳時代前期の年代試論」『古代』第一〇五号　早稲田大学考古学会、一―二七頁。
森下章司　一九九八c　「美濃の前期古墳出土鏡」『土器・墓が語る』第六回東海考古学フォーラム岐阜大会、三四四―三四七頁。

図表出典

※　所蔵機関、保管機関記載の資料は、岩本原図および拓影による。

図1　愛知・兜山古墳（名古屋市博物館蔵）をもとに作成。

図2　岩本作成。

図3　231鏡　島根・造山一号墳出土【車崎編二〇〇二】一六五頁―一。
　　228鏡　出土地不明（五島美術館蔵）。
　　225鏡　大阪・茶臼塚古墳（柏原市教育委員会蔵）。

図4　228鏡　出土地不明（五島美術館蔵）。
　　223鏡　大阪・御旅山古墳（大阪府立近つ飛鳥博物館保管）。
　　225鏡　大阪・茶臼塚古墳（柏原市教育委員会蔵）。

230鏡　京都・妙見山古墳（京都大学総合博物館蔵）
226鏡　大阪・御旅山古墳（大阪府立近つ飛鳥博物館保管）。
224鏡　京都・寺戸大塚古墳前方部（京都大学総合博物館蔵）。

図5
203鏡　福島・会津大塚山古墳（福島県立博物館蔵）。
216鏡　京都・園部垣内古墳（園部町教育委員会蔵）。
210鏡　福岡・一貴山銚子塚古墳（京都大学総合博物館蔵）。
218鏡　伝京都・長岡近郊（京都国立博物館蔵）。

図6
203鏡　福島・会津大塚山古墳（福島県立博物館蔵）。
204鏡　大阪・御旅山古墳（大阪府立近つ飛鳥博物館保管）。
207鏡　伝岡山・鶴山丸山古墳（天理大学附属天理参考館蔵）。
216鏡　奈良・新沢五〇〇号墳（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館蔵）。
212鏡　福岡・一貴山銚子塚古墳（京都大学総合博物館蔵）。
208鏡　福岡・一貴山銚子塚古墳（京都大学総合博物館蔵）。
213鏡　出土地不明（黒川古文化研究所蔵）。
219鏡　出土地不明（明治大学考古学博物館蔵）。

図7
235鏡　愛知・小木宇都宮古墳（宇都宮神社蔵）。
233鏡　福岡・一貴山銚子塚古墳（京都大学総合博物館蔵）。
245鏡　愛知・甲屋敷古墳（小牧市教育委員会保管）。
244鏡　伝鹿児島・新田神社（新田神社蔵）。

図8
235鏡　愛知・小木宇都宮古墳（宇都宮神社蔵）。
234鏡　滋賀・天王山古墳（京都国立博物館保管）。
233鏡　福岡・一貴山銚子塚古墳（京都大学総合博物館蔵）。
238鏡　大阪・駒ヶ谷宮山古墳（大阪大学文学部考古学研究室蔵）。

（大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センターPD研究員　　）

250鏡　長野・新井原八号墳（個人蔵）。
246鏡　伝福岡・二丈町付近（名古屋市博物館蔵）。
245鏡　愛知・甲屋敷古墳（小牧市教育委員会保管）。
244鏡　福岡・沖ノ島一七号遺跡【原田一九六一】第二六図を改変。

図9
117鏡　兵庫・城の山古墳（和田山町教育委員会蔵）。
115鏡　兵庫・城の山古墳（和田山町教育委員会蔵）。
88鏡　兵庫・東車塚古墳（加古川市教育委員会蔵）。
131―2鏡　伝大分・七ツ森古墳群（個人蔵）。

図10
A群　島根・造山一号墳【三木一九六六】一八二頁――八。
B群　大阪・御旅山古墳【大阪府教育委員会一九七一】三八頁第五図。
C群　大阪・御旅山古墳【大阪府教育委員会一九七一】四〇頁第七図。
D1群　岡山・鶴山丸山古墳【三木一九六六】一八三頁――二。
D2群　滋賀・亀塚古墳（栗東歴史民俗博物館蔵）。
E群　佐賀・歪路寺古墳【大塚・小林一九六六】五七頁第三図。
F群　出土地不明　【明治大学考古学博物館一九八八】七七頁。
G群　愛知・小木宇都宮古墳（宇都宮神社蔵）。
H群　福岡・一貴山銚子塚古墳【森下一九九三】六六頁図2。
I群　愛知・甲屋敷古墳（小牧市教育委員会保管）。
J群　福岡・沖ノ島一七号遺跡【原田一九六一】第二六図。

表1・2　断面図はすべて岩本作成の模式図。
岩本作成。

The Production and Development of "Imitations "of Standard Mirrors with Triangular Rims and Designs of Divinities and Animals

by

IWAMOTO Takashi

The author has considered the production and development of "imitations" of standard mirrors with triangular rims and designs of divinities and animals in terms of their form.

The following points have been clarified in this article; first, the similarity of forms is related to the existence of the standard, and it is highly probable that the standard reflects the image of the products. Secondly, by focusing on the standard, it became possible to discuss the system of production more concretely. Consequently, it has become clear that two or more producers, or groups of producers, manufactured such "imitative" mirrors and that groups of mirrors that were produced according to differing standards coexisted. Furthermore, the article points out that one group of producers of such "imitative" mirrors with triangular rims and designs of divinities and animals was related to the producers of imported mirrors of the same type, but that there were differences in terms of form between the mirrors of the two producers.

Finally, the author demonstrates that the period of production can be calculated from the degree of fluctuation from the standard, and that the period should be understood in terms of the framework of all mirrors with triangular rims and designs of divinities and animals, thus going well beyond the plane of the "imitative".